子規會誌

子規と内藤世南　白田三雅……一

大原其戎の墓碑銘　森元四郎……七

現代連句の実作と鑑賞　鈴木春山洞……一三

川本臥風と松高俳句会　川本陽吾……一九

子規と周辺の人々に関する研究論文　子規記念博物館編……二七

六六号　平成七年七月

例会記録

○三月例会（第六二六回）

平成七年三月十九日（日）　正宗寺本堂　出席二十四名

浦屋黨副会長司会、和田茂樹会長あいさつにつづいて講演。

講演「子規と内藤世南」

幹事　白田三雅氏

終わって会長より古調ならびに民謡調「伊予の湯」の紹介あり。

○四月例会（第六二七回）

平成七年四月二十九日（日）　子規記念博物館

出席五十名

総会　平成六年度事業実施報告並びに収支決算報告、平成七年度事業計画並びに収支予算案の承認。

記念講演（子規博講演会に合流）

「漱石と子規・松山――『坊っちゃん』をめぐって」

群馬大学学長　平岡敏夫氏

○五月例会（第六二八回）

平成七年五月十九日（金）　正宗寺本堂　出席二十五名

浦屋黨副会長のあいさつと講師紹介につづいて講演。

講演「子規・漱石・伯厳」

会員　頼本冨夫氏

子規と内藤世南

白田　三雅

一　はじめに

周桑郡で子規門といえば、森田義郎と内藤五郎が双璧である。義郎については、既に山上次郎氏をはじめ多くの人々がとり上げ、その情熱的な歌風と子規に愛されたこと、晩年の漂泊の人生が語られ、多くの人の知るところである。一方、内藤五郎は穏やかな性格で、地方の教員、村治に終始したことからあまり知られていない。今回、嗣子鋼彦氏（茶号宗玄）の格別の御配慮によって、子規を敬慕し、歌俳を愛し、地方の俳歌壇を育てた生きかたを垣間見ることができたので、以下にその概要を記して大方の参考に資したい。文意未熟による誤解のなきことを希むものである。

二　生いたちと経歴

内藤五郎（明治4年5月24日―昭和21年10月10日、一八七一―一九四六）は、旧桑村郡三芳村庄屋、内藤久五郎滉義の長男として生まれた。その出自は大織冠藤原鎌足の裔孫で、奥州にあった藤原元清につながる。秀衡滅亡後頼朝に仕え、黒本郷の押領使であった。のち、戦国のころ故あって伊予に下り、桑村郡越遠原に住み、橘郷八千石を領し、地蔵の浜で討死、その子は橘大目として長宗我部元親に服し、天正13年小早川隆景と戦い野々市原に戦死、その子は河野通直に仕えたが、河野氏が竹原に移ったので農間に下り、江戸時代には三芳村の庄屋として栄えた。祖父義伍の頃この地は天領（幕府領）であったため長州征伐に農兵隊を率いて参加、維新の折土佐藩に占領されて家財を没収され、特に姓名をも憚る事態に至った。五郎翁はこの窮乏の中に育ったので、少年の頃より辛惨をなめ親類の支援を得ることが多かった。その閲歴をみると、

明治14年　地元必明小学校入学。
同　16年　母の郷里である川之江の城山小学校に入る。
同　18年　新居郡撰善小学校に入っており、その転校はおそらく親類の援助もかかわったであろう。
同　22年　国安村（隣村）の小学校授業生となる。
同　24年12月　小学校簡易科教員免許を得る。
同　30年12月　小学校正教員免許を得る。この間翁は真摯に学んだようで、遺宅には多くの辞書などが毛筆で丁寧に写されたものが残っている。

閑話休題。私の知るところでは、松前町徳丸の高忍比売神社の祠官の後藤正利翁も、当時英和辞典が買えなくて借用筆写し、更に英語リーダーも借覧筆写したという。嗣子正健氏によれば、正利翁は

リーダーを和訳したのち再度英訳して一語も相違がなかったという。

このような五郎翁の努力をみた叔母日野実子刀自の配慮であろうか、明治31年東京専門学校に入学、同年夏休に東京郵便局通信書記補のアルバイトをしている。同34年末脚気を病み退学帰郷静養する。

明治35年4月28日　吉井村小学校訓導。

同　42年3月より国安小学校訓導。

大正元年11月末再び吉井校へ転ずる。

同　13年4月　吉井村助役に選ばれるが、助役は名誉職で無給のため、兵事・社事係を兼ねて生活に資した。

昭和16年吉井村村長に選ばれ、終戦後の公職追放により辞任、昭和21年10月10日、76歳でその生涯を享える。

翁は生地三芳村を愛し、次の歌をよんでいる。

ふる里は昔一茶が実報寺の花に宿りしィョの中村

北に世田南に石鐵東御戸燧灘風はぐくみし村

松青し砂白たへに水清き大明神川のはぐくみし里

二組の桐のご紋の銀盃に明治の初年輝きし村

西は杉東安倍氏黒本は我内藤氏三庄屋三芳

小さけれど天領の庄屋黒本と近郷近在に仰がれし吾が家

翁は、号世南、鐵北、玄元草庵、寤楼、悟楼、晩春、吉堂、菊子、為女、亀女、寤堂、悟堂がある。なお諱は督義といった。

三　子規との交遊

世南翁が子規と交わったのは、明治28年子規の指導で活発になった松風会に参加していた同僚の志賀仁里、西稲里庵に紹介されたことに始まる。なお、今遺宅に極堂翁より「ほとゝぎす」拡販要請の書簡があり、その頃から子規に近づいたようである。その書簡の第一は翁が松風会に参加したことからはじまる。明治29年末頃俳句について質したのに対して応えたもので、末尾に奉賀とあるところから明治30年初頭に届いたものとみられる。

手紙　(一)

通例世ノ俳家ハ我堂ノ俳句ヲ見テ詞ガ荒カマシイト云フ　然レドモ彼等ノ穏ナリト云フ句ハ日常ノ俗語トシテ耳慣レケルガ為ノミ　俳句ハ美文ノ一種ナレバ通常ノ言語トハ多少異ナルコトナキニ非ズ　又通常ノ言語ヲ用フルモ必ス其善キ所ヲ採ラサルヘカラス　サレハ我堂ノ俳句ハ第一ニ詞ノ懈弛即タルムヲ嫌フ（是ハ我々ノ創始ニ非ス　蕪村句集ナトハ一句モタルミタルモノナシ）月並者流ノ言語ハ常ニ此嫌フ所ヲ犯セリ　通常ノ言語ノたるみヲ避クレハ　則可ナリ　又雅言漢語ヲ用フルハ調和如何ヲ顧ルヲ先トス　堅クロシキカ必スシモ善キニ非ス　要スルニ言語ハ趣向ニ伴フ　趣向ノ如何ハ言語ヲ擇フノ着眼点也　此等ノ訳ヲ解シテ始テ我堂ノ俳句ヲ論スヘキノミ　右ハ乍序世ノ俳家ニ対セラルヽノ御辨護ノ参考迄ニ奉賀ス

さらに、それにつづくものと見られるものに次の手紙がある。これは翁が周桑郡の同人の句選をたのんだのを断ったもので、その後子規は体調が思わしくなかったことを裏付けている。

手紙　(二)

別封返璧度病気之ため遷延及今日候段御海涵　小生身體衰弱之

ため俳句の評点は当分相ことわり申候間　左様御承知被下度候　　早々

八月一日　　規

内藤詞兄

さらに9月23日の次の書簡がある。これは内藤鳴雪の住所を尋ねたのに応じたもの。なお、子規の句は『子規全集』（講談社版）にも未載のものである。

手紙（三）

拝復

内藤鳴雪翁住居ハ

東京本郷区真砂町十八番地ニ候

右御返事迄　　匆々

九月二十三日　　子規

世南詞兄

秋草の数に入りけり蘭の花

翁は、この後、鳴雪に自分の雅号を求めたようで、鳴雪からは「席堂」・「悟堂」を選ぶも、なお「世南」でよくないかと答えた一通が別に残されている。手紙のそれぞれの封筒はあるが日付ははっきりせず、明治30年とだけわかるので、翁の上京前の交流はこれで了っている。翁は、明治31年3月28日着京、東京専門学校（早稲田）に入学するが、残された記録によると、上京直後の土曜日より子規庵句会に参加したようで、以後毎月根岸庵、虚子庵、早稲田、十句集の句会に欠かさず参会したとある。

明治31年頃、子規に断って持帰った句会稿三十枚ばかりのうち、次に掲げるものは子規の筆跡である。

灌佛を覗いて通る旅路哉

江の中に洲少しあり花薄

穂薄の押し倒されし出水哉

山里や筍に飽く麦の飯

庭荒れて蜘の囲多き薔薇咲ぬ

桔梗に足を延はすや竹枕

なお、これには極堂翁の次の書簡が添えられている。

貴家御蔵の左の七句乃ち

灌佛を覗いて通る旅路哉

江の中に洲少しあり花薄

穂薄の押し倒されし出水哉

山里や筍に飽く麦の飯

庭荒て蜘の囲多き薔薇咲ぬ

桔梗に足を延はすや竹枕

これらは明治卅二、三年頃の子規庵における句会の際、子規の記したる紙片と被存候其席に出席したる世南君が貰いうけて帰りしものと想はれ候虚子氏亦これを認め候はもはや疑ひ無之候お需めに応じて此事を記

昭和二十六年九月二十日　　柳原極堂　印

内藤鋼彦様

このうち、二句は『子規全集』にも載っていない新発見のもので、記録によると、明治31年のものと確認された。

このほか、遺宅には鳴雪の家を尋ねたときその順路を子規が半紙に書いて与えたものがある。また、別に在京中にもらった次の年賀状がある。

賀状

赤門の橙ちさきかざり哉

年こゝに新たなる梅の蕾かな

御所の門門松もなき尊とさよ

門番に餅をたまふや松の内

裾を引く妻の立居や三ケ日

裏門の輪飾り人に取られけり

めでたさも一茶位や雑煮餅

病床に蜜柑剥くなり屠蘇の酔

賀　正

新年めでたく候

皆様めでたく候

私もめでたく候

明治卅二年一月

東京下谷区上根岸町八十二番地

正　岡　常　規

なお、子規庵の蕪村忌にも参加し、その32年、翌33年の写真が大切に蔵されている。

四　子規敬慕

翁は、早稲田卒業後新聞記者として世に出る心算だったようだが、明治34年末脚気を病み心ならずも帰郷したのち、吉井村小学校訓導となり、かたがた叔母日野家の家庭教師をしたようである。その間同僚の渡部一舟・志賀仁里・西稲里庵などと句作にはげみ、短歌にも精進し、子規への敬慕を深めたようで、時折の句や歌にその心情が吐露されている。

子規堂再建

千万の草木はみのる豊秋にうれしきことをきくぞ楽しき

子規庵のおもひ出の写真ひらきをりいで湯の街の初秋のあさ

君逝きて見物地図にてしられし田端の里に魂魄しつむりぬ

歌人の君のふさわしきくれ竹の根岸の里の鶯横町

素子はて自らは股の肉をとられ生死の中をさまよふあはれ

子規堂の焼けても子規忌贈りやる句やすゝまず秋風碑前に蹲まる

翁は、昭和6年東京復興祭の折、吉井村助役として上京し、子規庵を訪ねて律子刀自に逢い、往古を偲び遺愛の菊苗及び山吹の一枝をもらい受け、吉井の自宅で愛育した。その心情が次の句と歌でうかがわれる。

子規庵の菊を数へてたむけけり

子規庵の菊を「蕪翁」と名つけけり

貴にあらす白重あらぬ平凡の菊よ子規庵の庭の小菊よ

つゝましき君にてたへてこの菊は千秋に千秋吾あるかも

その山吹は今も三芳の鋼彦氏方を彩っているが、菊は戦後に惜しく種切れしたようである。

五　地方俳壇の指導

世南翁は、松風会に加わり、以降一貫して「ほととぎす」に参加、子規に直接参堂した。その後、渡部一舟などとむすんで稲里庵会・周藻会など郡内の俳人とともに後進を育てるのにつとめた。さらに、峠を越えて桜井の加藤文狂（徹太郎のち梅夏）らのグループ（無声会）とむすび盛んに交流している。なお、大正から昭和に入って「アザミ」などにより、以下の人々と交り子規派の育成に努めた。

大正2年今治「番茶会」

舟水、鷗民、月舟、掬泉、光水、玉楠、蕉雨、きく泉

昭和2年「アザミ」

菅麻車、春灯、内藤世南、喜雪、秋夕、清香、愛香、秋山梅王、佐藤一枝（長野）、丸山竹梅（長野）、川又吾妻（横浜）、波多野去水（伊予）、武田露山（伊予）、武田喬月（伊予）、寺町松月（伊予）、藤原耕人（岩手）、正居、照月、静女、玉泉、関谷さし桃（松山）、天鼓、八木花舟女（松山）

「徳田吟社」

「珠水吟社」

徳田村　大沢疑陶

多賀村　越智納言女、豊島禮月

吉井村　今井愛香、今井佳村、岡田茂稲

新居郡　藤原新居女、藤原公子女

昭和2年「旭桜吟社」

神野豊水、豊島旭山、豊島豊水、徳永渓水、西山鶴水、徳永愛華、豊島紫月

六　短歌を楽しむ

翁が、子規に直参したのは短歌革新を説いた明治31年からであった。勿論同郷の森田義郎もこの時期子規門となる。ここでともに学びやがて帰郷、叔母日野実子より添削を求められるに及んで、作家の心構えから指導にあたった。実子はやがて「心の花」で認められる。元来、実子は幕末より盛んであった歌人に学んで古今調に親しんでいたのであったが、翁によって開眼されるのである。ちなみに「心の花」には西条出身の石搏于亦がいたのでその縁もあったであろう。翁は実子との関係から歌を発表することを控えたが、その遺作には心に残るものが多い。次にその風懐をあげておく。

昭和11年実子追悼

かくばかり大往生をとげましぬ古りにきかもよわれ涙のむ

玉章のうれしきほかにうれしきは気高き一日初たより哉

竹格子くゞりて蝶の一つ来ぬ木の芽田楽すなるくり屋に

取あえずカップに挿すや寒アヤメ灯にすける水は堅水の水

甲子新年

元日はうれし二日はいと楽しみや三日おしくも夕暮れとなる

復興の都の春やいかにぞと年の初を拝むにつけても

新しき年にあふせの鼠どちちゅう〳〵雀の笑ふきぬ〳〵

新しき年は来にけり皆人の希望にもゆる年は来にけり

山茶花のふとめにつきしその日より降る鳥の音もいとゞさびぬる

病みにやみあまりに児等の病みぬればわれ罪の如妻にくやしむ

かゝなへて四十九日となりにけり秋と果てぬるさびしみの底

昭和十又五稔庚辰の正月に桧垣大人へ

紀元こゝに二千六百喜美が名の多都の春こそ幸くましませ

明治大正昭和の三代事へなゝそ路六坂われは越し来ぬ　絶筆

七　先輩知己

翁が、その天資に加えて人格形成に大きい働きをしたのは先輩知己であろう。子規は勿論であるが、同郷の先輩・内藤鳴雪は同姓のこともあり親近したようで、その交流を示すものは多い。また、子規門では虚子・碧梧桐をはじめ、極堂・霽月・竹村修竹・下村為山などに兄事した。早稲田同学の赤木格堂を子規に紹介したのも翁で、のち代議士になってからも交流が絶えなかった。早稲田の頃、志賀重昂の学風を慕いよく聴講したと記している。同友に西稲里庵・志賀仁里・加藤文狂らがいる。のちに政友会総務として活躍した河上哲太は教え子である。その他子規同門の人々とは折りにふれ交わりを重ねた。晩年、司法書士であった村上平次氏を愛し、役場の宿直室で真闇になるまで灯もつけずに話しこんだという逸話もある。温厚篤実の処世ぶりは残された記録によく現われている。次に和歌と俳句を掲げておく。

村上兄に（霽月翁、子規堂再建に尽力）

白玉のよし包むとも埋むともやがて光のあらはれにける

柿の子規為山カステラ虚子まんじゅう碧雪せんべい碧梧ようかん　（九、一九）

漱石忌何々よけん柿の子規せんべい鳴雪碧梧ようかん　（一二、九）

虚子碧梧秋竹などと訪ひし笹の根岸の鶯横町

虚子庵の梅の消息冬の雨

碧梧桐氏移居（昭和10年秋）

見たまゝに願の気嫌を笹鳴ける

極堂洗心庵に移居（昭和20年）

炉あたたかに故人夢みる昼もあらん

八　むすび

世南翁は、遊学中の病気により志望をすてたが、野にかくれたる子規派の一闘将といえようか。残された記録や句歌を集大成して後世に伝えることを期待する次第である。今回はその一端を記して翁の面影をしるよすがとしたい。なお、おわりに数句をしたためておこう。

萩の戸や女の子出て来て猫を呼ぶ

読書子に枝豆のあり灯の燈める

大牡丹をゆゆしく活けて年賀受け

命惜しむ日灸三里や梅雨の入り

甲子新年吟詠

めでたければもの皆めでた松の内

帳祝の帳にも句かや歌もかや

立春大吉

花ことばその初夢や占はん

はつ秋や瑠璃より青き余吾の湖

なお、翁は日本画をよくし、日野松太郎、青野岩平などと詩文、画をかき交遊している。

（平成七年三月例会講演）（理事）

大原其戎の墓碑銘

森　元四郎

この住宅平面図（次頁）は昔から私の家にあったもので、この図面のまん中どころに興産社とあるところのま上が私の家である。

その右の「三穂（神）社」とあるところは、今は、お宮が他へ移ってないが、大原其戎の「其戎」の号に縁があるところである。三穂神社の祭神は、安芸の宮島より勧請したもので、「おえびすさん」がおまつりしてあった。「其戎」の「戎」はえびすと訓む字で、その上の「其」は、父親の俳号「其澤」の「其」を受けついだものである。

そんなわけで、其戎の家は、この図面の示すとおり、三穂神社まで二十八間あまりのところにある。

それで、其戎の句にも

初笑がほするや戎と向ひ同士　　其戎

というのがある。

この三穂神社のすぐ左角が「中仕寄場」で、私の子供時代からそう呼んでいた。「中仕」というのは、荷船から荷物をおろしたり、積んだりする男衆、屈強の男性が大勢詰めていた所だったが、今は理髪店になっている。

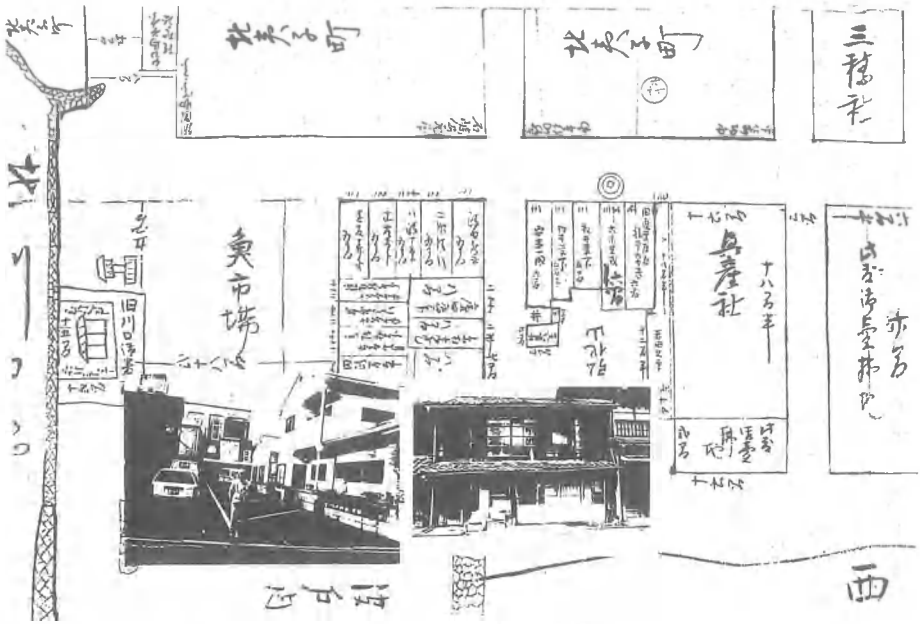
そこの図面に、大きく横に北夷子町とあるのは、勿論、えびす社の北だから、というわけである。その後、この町は三津栄町というようになり、町内会の名も「北栄会」、老人クラブも「北栄寿会」と呼ぶ。

私のこの家も、この図面の森の下半分で、その地所は、上の「三穂町」へ通りぬけになっており、その上半分が私の生家で、これから、よく今日の話に出るひあろうと思われる。私の父の父、森栄次郎こと森連甫の家である。

下半分の、今私のいるところは、父の姉が分家をして、養子を迎えたところで、そこの子供が次々と若死にをし、田窪から養子に来た人もなくなったので、私が、父の姉の家をついだもので、分家だから苗字もかわっていない。

そんなわけで、其戎さんの家は、私の家の右斜め向う側にあったので、其戎さんは、毎日のように、私の家へ遊びに来た。

其戎は色白で眉秀で、頭長く、鼻すじが通って、やせがたで背高く、おだやかで世事にこだわらず、人との応待も礼儀正しく、そのおだやかな姿は長者の風格があったという。日常の生活は、私の父のことばでいうと単素、つまり簡単質素、服装もたいてい十徳姿であったが、夏は藍地に二尺もあろうという大きな鯉を染めぬいた、



その頃としてははでな浴衣を着て、腰に渋うちわを差し、雪駄をチャラチャラと音をたてながら「連甫さん、おいでるかな」とおいでになったという。

さて、この図面はいつ頃のものであろうか。図面の「三穂社」は、正しくは「三穂神社」という。その三穂神社は、この辺りでは最古のお宮で、文政六年（一八二三）の古図にも、海に面したこの位置に見えるが、明治十九年には、北の川口へ移っているから、それ以前の図面だと判る。

なお、この三穂神社の下右に「興産社」とあるのは、国立銀行が明治一一年に発足したのに対して、民間銀行類似の金融機関のことで、昔の本町・紙屋町等の伊予絣・綿花業者の資金関係を助けたものらしく、明治一三年までに県下で九行あり、中予では、温泉郡本町の興産会社が栗田与三（栗田樗堂の家）を頭取として発足し、明治四〇年頃には仲田銀行となり、発展していったといわれる。

これらのことは、県史、社会経済の④の七九ページ、ないしは二六四ページをご覧いただきたい。

そんなわけで、この「興産社」とあるのは、当時の庶民相手の金融機関の一つと考えられ、今日の「商工中金」のような、そんな格好のよいものではないかもしれぬが、大体、時期は明治二〇年までの頃と考えてよろしいのではと思う。

とすると、子規が極堂と二人で、テクテクと松山から其戎に俳句の手ほどきを受けに来たのが明治二〇年の七月とされているので、子規が俳句に目をひらいたという歴史的に大きな場所の環境は、大

体このようなところだったと考えて、大きな見当ちがいはなかろうと思う。

その明治二〇年というのは、一八八七年だから、今年から一〇八年前のことになる。

その時のことは、子規に同行した極堂の本『友人子規』の一三八ページ以下にくわしい。

一度子規を訪問すべく予は玄関に入ると隣へ廻ってくれとのことで……（以下略）。

それによると、其戎のこの家は二階建だったことがわかる。

当時のその家は残っておらず、只今では村島さんという方が管理しておられ、写真はことし一月写したものだが、うしろの高いビルは、石崎汽船の本社である。『マップル・松山市』によると、松山市三津一丁目四ー九に当たるところで、そのま裏が其戎さんのお宅であった。

なお、この石崎汽船の本社ビルは、県庁や万翠荘を手がけた木子七郎が大正十三年十二月に完成させた本格的西洋建築で、総工費三万八千三百六十六円だったという。

そのま裏が其戎さんのお家だったが、その家は、私の子供の時にはすでになくなっており、別の写真（昭61・11・5）のように、古ぼけた借家になってしまっていたが、二、三年前、その家もとり壊して、写真のように駐車場にかわってしまった。そのうしろのビルが石崎汽船の本社である。その手前に、昔、弘化山があったところである。

「弘化」というのはその時の年号に因んだもので、今から一五一年前の一八四四年から五年間つづき、そのあと、嘉永・安政・万延・文久・元治・慶応・明治とつづくのだから我々にはちょっとピントが合いにくい。

それに、子規さんがここに来られたのは、私の生まれる二十五年も前のことだから、全く別世界の感がある。

さきほどの、十徳姿の其戎さんの話以下、私が話したのも、すべて、父親・森連翠（要三郎）や母から聞いた話である。

さて、今から一〇八年前の明治二〇年七月、其戎居宅を子規・極堂が来訪の結果、子規は其戎の教えを受けることになるが、これ以後のことについては、資料をすべて和田会長に提供したので、会長が丹念にこれを研究されて、行届いた資料となって残っているが、このようにして、子規の「真砂の志良辺」への投稿はつづく。

その手はじめは、「真砂の志良辺」九二号にくわしい。

子規は生涯に何万という句を残し、短歌に、近代の文章づくりに、書いて書いて書きまくって、全集も二十五冊に及ぶが、彼の文の活字となって先ずあらわれたのは、この「真砂の志良辺」九二号が最初である。その意味からも、これは記念すべきものといえよう。

はじめは、九二号のように、「松山・正岡」としていたが、後、「東京・文鬼」として以下三十五句が見られ、藤野古白・新海非風・竹村其十（鍛）らも投句しているのは、すべて子規に倣ったものであろう。

さて、この其戎の居宅で、子規は、どんな指導を受けたのであろ

うか。

二十一年五月分の丈鬼（子規）の投句に対して、其戎は『筆まかせ』に

友は皆寄りて馴るゝやはしら酢

入梅晴や所々に蟻の道

此両吟よろしく候　先柱酢之御句わきて、集冊上座に撰取申候

五月九日　　其戎

丈鬼様

とあり、二十一年五月十二日発行の第一〇一号の「題　入梅　酢　行々子」の其戎選句中、天地人からはじまって、第五位に入選、

友は皆寄てなれしかはしら酢　　東京　丈鬼

と中七を添削している。

「入梅晴」の句は「真砂の志良辺」には見えず、没になったものだろう。

両句とも、子規句集『寒山落木』にみえないのは、子規の俳句に対する見方が推移したことを意味するものだろう。以上和田会長の文による。

それにしても、この「はしら酢」ということばは、今日、ちょっと通じにくい。

歳時記にも見えないことばだ。

今日の日本で一番くわしい辞引（小学館発行の『日本国語大辞典』）には、さすがに載っていて、それによると「柱鮨」の項には、鮨飯に、小粒の貝柱をのせて海苔で巻いた鮨、または、平貝を用いた鮨。俳諧、発句手爾葉草「松杉に日を二度みたり柱鮨　松雫」、手紙雑誌一一、八号甚閑静頗得意に御座候〈西園寺公望〉「時々は押て見る也はしら鮨」とある。

はじめ、私は其戎の家は海岸近くだから、はしら鮨という「はしら」とは、船の柱に因むのかと思っていたら、「貝柱」の「柱」だとわかった。

また、長谷川孝士先生のお調べでは、鮎を壺につつんで焚火で焙り、柱に綱でくくりつけておくと、一晩に熟れて食べられるようになる。これを「柱の鮓」という。柱にくくりつけておくのは、おし石をおいて熟らすかわりである。早鮓ー一夜鮓のはじまり、とある。（日本の食文化大系13巻「すし通」59、60ページ）

それにしても、其戎さんの指導ぶりは、ちと古風だなとも思ったりしたものだ。

其戎の句を見ると、よく、「ひやみ」という語が目につく。

それを倣ったものか、丈鬼（子規）の句に、

鳥啼やひやみをさそふ花の奥　　東京　丈鬼

の句が、其戎没後の明治二十二年の四月号で連載で出ている。

それを『寒山落木』の中では、中七を「独りたたずむ」と訂正してのせている。

こういう過程を経て、子規は新しい俳句の世界へと段々に育ってゆたものとみえる。

さて、おしまいに、標題の其戎の墓碑銘にうつることにしよう。

その墓は「まっぷる松山市」一六三ページにある。

大可賀一丁目5三津公園とある一画。そこには家は一軒もないから、この地図では無地となっている。

私が子供の頃は、この一画は④～⑥のすべてが墓地で、他に庵寺が一つだけあった。

そこを、我々は、当時小松原と呼んでいたが、一面の墓原であった。

そんなことを私がよく知っているのは、ここに私の家のお墓もあったからである。

ところが、市の方針で、突然みんな立ちのきとなり、私の家の墓などは、高浜中学の東の方の新設の墓地に移らされることになった。

ただし、松江さんのお墓とお堂と、大原其戎らのお墓は残って、今もそこにある。

大原家の墓は、その昔は今とちがって、今の墓地のすこし南寄り辺りのところにあって、向って左から其擇・其戎・其然の親子三代の墓が北向きに立っていたが、今は西向きで、三代目の其然の墓はない。

その其然も墓石だけは、たまたま私がひかえていたのでここに記しておこう。

四角な普通の墓石で、西側（海の方）に

「霜林院英誉清閑居士

霊知院勝誉妙緑大姉」

北側に

「大原林三郎　行年八十二歳

大原トラ　行年四十八歳」

南側に

「大正十三年三月十三日

明治二十九年九月廿九日」

とあり、早死したトラが明治二十九年に没したのであろう。東側は無地であった。

さて、今は、左の端に其擇の墓があり、

大原氏

其擇之墓

嘉永元戊申十月二十四日　（左側面）

とあり、裏に

造作（ママ）なふ

共にきえけり

雪佛

とあるので、建立事情が大体よくわかる。

其戎の父の墓である。句にユーモアがあっておもしろい。

以上の二基の墓にはさまれて、その真中に其戎の墓があり、台石ともで私の身長大の青い自然石で建立されている。

中央に大きく

宗匠四時園其戎翁之墓

その右側に小さく

明月や丸うふけ行（く）

左に

ものゝ影

とあり、その下にちいさく

辱友東州生

とあるが、その東州生の下の字ははっきりよめない。

大きな辞書でみると、正字体は、「彝」とある。墓碑の「彝」は略字体のようだ。

しかし、この句をかいた人は誰なのか、今のところ残念ながらわからない。

大原家の身内にも心あてになるような人物はいない。

今日の話のテーマから思い浮かんだ人物はあったのだが、その人は、其戎と同門で、京の桜井梅室の養嗣にまでなった内海淡節という松山の俳人で、二人の娘が、それぞれ香畦、秋蘭という才媛であった。その妹は、父の墓碑をまで書いたといわれる人だが、その秋蘭女史の婿になる人に、「岡田東州」という人物がいたが、その人は、其戎没年の明治二十二年前の明治十五年八月二十二日に既に死去しており、今のところ、まったく、これはと思う人物が浮かばない。

念のため記すと、岡田東州の墓地は衣山の宝塔寺にあり、「東州岡田先生之墓」としてある由、四十歳だったという。伊予史談一一六号にくわしい。

夫に死別した秋蘭女史は、二十八歳の明治二十一年、松山に帰り、この年の冬、東州の墓地を建立、魚町の出雲神社裏で私塾をひらいて口すぎをしていたという。

其戎の辞世の句は、「寐姿の司や花を枕もと」という句だということになっている。

この句は、其戎没時の「真砂の志良辺」にも、はっきり載っているのに、墓には別の句が刻まれたのは、どういう事情なのか、その点もはっきりしていない。

司というのは、古語字典によると、「高く位置するもの。最上。主要なもの」――との意味があるという。だから、この句は、「寐姿の最高なものは、花の枕もとでゆっくりねむることだ」くらいの意味だと思う。死者への句にはふさわしいと思うが、それはここにとり上げられず、この句（明月やの句）になったのは、どんないきさつなのか、一向にわからない。

しかし、この句も、「丸うふけゆく」という言い方が、従来の、月への平凡な見方ではなく、大変新しくて、すてきな句だと思う。手許の「真砂の志良辺」には見られない句だから、一向に、この句が詠まれた事情がわからない。その点、しっくりしないものが残りはする。

しかし、この明月の句は、カメラ・アングルとしては大変新しい角度から明月を見ている句だと思う。

十分にテーマをこなせていない段階で、急に本日発表となってしまったことをお許しいただきたい。

後日、機を得て、再考したいと考えている。

（平成七年三月例会講演）（副会長）

現代連句の実作と鑑賞

鈴木春山洞

○

連句は古くて新しい詩であります。

連句は、愛媛県と、古い時代から近代・現代まで、根本義から流行まで、栄枯盛衰の全てにわたって、深いかかわりあいをもっている文学であります。

連句は古くは俳諧之連歌と呼ばれ、略して俳諧（連俳）と呼称されましたが、高浜虚子先生が「連句」を提唱されましてからは、「連句」が定着、通称となっていますが、今でも儀式めいた場合は「俳諧之連歌」が用いられます。

連句は日本民族独創の詩であります。

連句は独吟といって一人で作るときもありますが、それはむしろ例外で、普通は二人以上の複数の作者（連衆）によって作られ、連衆の在るところを「座」と称するところから、「座の文学」とも言われています。

連句のルール（式目）は連句を作る上ではなくてはなぬものです。「連句」が古いものですから、式目も多岐にわたりますが、これを全て熟知しなければ作れないものでもありません。座に必らず捌がいますから訊ねながら遊べばいいのです。

捌は昔の宗匠と執筆を兼ねたものです。オーケストラの指揮者にあたります。

連句の中に「伝統連句」だの「現代連句」だのと区別があるわけではありません。連衆が現代に生き、現代生活を営み、現代に生きる言葉を使用し、現代の生活感情を、詩的感情を高らかに詠いあげれば、そこに「現代連句」が存在するのであります。

連句の詩形式は沢山ありますが、基本的に長句と呼ばれる（5 7 5 計17字）の短い独立した詩句と、短句と呼ばれる（7 7 計14字）の短い独立した詩句とを交互に置き並べるものです。いくつ置き並べるかは詩形式によって定められ異なるものであります。

連句は、いくつ置き並べられましょうとも根本をなすものは三句であります。A（打越の句）・B（前句）・C（付句）と呼ばれています。作る（実作）ものは付句であります。

松尾芭蕉の言葉に「歌仙は三十六歩なり。一歩もあとに帰る心なし。行くにしたがひ、心のあらたまるは、ただ先へ行く心なればなり。」（三冊子・白）があります。

松尾芭蕉は連句の芸術的大成者です。

歌仙は芭蕉創案の連句形式で36句構成。

連句は始めたら、後に帰ることを避け先へ先へと変化前進することが大切であります。

東明雅の言葉に「付句は、前句にのみ付き、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して、一巻の作品が創り出される。……この独自の運動・メカニズムさえ失わなければ、一巻が、どのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私は、それを『連句』と認めようと思ふ。『三句の転じ』は『連俳の生命』」があります。

○

橋閒石の言葉に「『折』から来る必然的な規約の墨守は、今日、既に、その意味を失いつつある――。月・花への過去の過度の尊重を否定し、無自覚な因襲は、『求めたるところを求める』所以でない。月花に限らず、一巻中の要件とされる四季・宗教・恋愛などにしても、運びの勢から、その一、二を欠く場合があっても、敢えて咎むべきではない。」があります。

○

松根東洋城の言葉に「自分は新しがり屋であることが最も嫌ひである。古連句を無条件に随喜するものである。それが新しいことを考へなければならないに至ったのは、実際、時勢上、止むを得ないからではあるが、更に連句を発展せしめ、俳諧精神をいよいよ向上せしめん為めでもある。（中略）いろいろのことをいろいろやるのも、畢竟は、もののあらゆる体容に、俳諧の根本義が施されたいため、また施すことによって、其の根本をしていよいよ光あらしめんが為。――『そろそろと行かう、但し、須臾もたゆまずに』」があります。

東洋城は大正十五年（一九二六）にこの言葉を「渋柿」に発表、連句研究でなく、制作（実作）に努力精進しなければならないことを、しきりに述べています。

〈資料　1〉

両唸歌仙「月光や」の巻

岡本春人　加朱評釈
鈴木春山洞　性格判定

発句1　月光や船傾ける江の渦　秋場　春山洞

中国旅行での作。江は長江（楊子江）。

脇2　奇峰連綴風韻は秋　秋会　春人

連ティはつらなりつづくこと。

第三3　渋桶のころがる土間に人なくて　秋会　洞

発句脇の大景の中での小景。

四句め4　鶏くくと遊ぶ夕ぐれ　雑場　人

前句の場所付け。

月の定座5　燕子花咲く八ツ橋を雨の中　夏場　洞

月の定座だが発句に月が出たので。

折端6　裾濃斑濃の初袷なり　夏自　人

スソゴは上の方が薄くムラゴは濃淡がまばら。

折立7　編笠の紐あごふかく喰ひ入りて　雑他　洞

そんな衣裳の踊りとも門付とも。

二句め 8　七難かくす色の白さよ　雑他　人

前句の紐があざやかな紅色になった。

三句め 9　温泉(ゆ)煙りのほのぼのと立つ露天風呂　雑半　洞

ゆけむりの中に玉の肌がちらり。

四句め 10　どこからとなく花の散り来る　春会　人

露天風呂に散り込む花びら。

五句め 11　白川郷合掌の村葺替す　春他　洞

岐阜県の北西部庄川の上流。

六句め 12　雪代山女ひらりひらりと　春場　人

ヤマメは夏だがここは雪どけで春。

月の定座 13　おぼろ夜の月はまろくて黄色くて　春場　人

まるい大きいお月さま。

八句め 14　田鼠(でんそ)の化(け)してうずらとなりぬ　春会　洞

七十二候の一つで春清明(せいめい)の中期に当る。

九句め 15　悠久の天地の間に生うけて　雑自　人

生物の一生なぞほんの一瞬。

十句め 16　大草原を蛇行する河　雑場　洞

悠久の天地の間を

花の定座 17　花氷きらめき青に又赤に　夏場　人

ウ四に花が出たのでここは正花(しょうが)になった。

折端 18　海鞘うごめける珊瑚礁なり　夏会　洞

ホヤは海中の岩に付着する動物。

折立 19　帰省子(ナオ)のクシャミ先生訪れて　夏他　人

激石の小説「猫」の俤。

二句め 20　蘭亭帖に日毎いそしむ　雑自　洞

王羲之の書道をひたすらに。

三句め 21　松風の古城の門の弾の痕　雑場　人

三橋美智也

四句め 22　改易受けしことの恨みに　雑他　洞

カイエキは十分に科せられた刑罰。

五句め 23　この頃の教師大方赤がちで　雑他　人

六句め 24　自縄自縛の歌仙文音　雑自　洞

あっちこっちと手をひろめたが。

七句め 25　ヒマラヤとシルクロードの旅したく　雑自　人

あこがれ。

八句め 26　媚薬の筐を腕に捧げて　雑他　洞

ペルシャ模様。

九句め 27　褥(しとね)より魅惑の笑みのちらちらと　雑他　洞

イスラム教徒でなく、これは街角の女。

十句め 28　交はせし枕数ふすべなし　雑半　人

筑摩祭ではその数の鍋をかぶるのだが。

月の定座 29　金銀の月の波間に竹生島　秋場　洞

荘厳な景。

折端 30　歯にしみとおる秋の夜の酒　秋会　人

酒はしづかに飲むべかりけり（牧水）。

折立31　鹿火屋守るほどの齢にながらへて　秋他　洞
　力仕事は出来ないが、まだまだ。

二句め32　大仏様の甍かがやく　雑場　人
　雑の句だが秋の夕日の感じ。

三句め33　むつかしき名のつく古墨買ひもとめ　雑自　洞
　奈良の銘墨。

四句め34　目に見え日脚伸びる日々なり　冬会　人
　冬の句だが春らしい感じ。

花の定座35　笛鼓急調千花かざし舞ふ　春半　洞
　絢爛とした花の宴。

挙句36　陽炎もゆる野路はるかなり　春場　人
　発句と対応した気分。

文音　昭和57年9月吉日　起首
　　昭和58年5月吉日　満尾

〈参考資料　1〉

○山中問答

○附方八方自他傳

立花　北枝

	（打越）	（前句）	（付句）
一句	自	場	他
二句	他	場	他

○連句は詩である。

○一句の性格

○人情

（俳諧専門用語、人間というほどの意）

○一句を人情により大別

三句	場	自	自
四句	場	他	他の会釈
五句	自	自	他
六句	自	他	他の会釈　他の向付
七句	他	自	自
八句	他	他	他の会釈　自

○三法・七名八体・員外

各務支考

付心（付けの手法・態度）　付所（付けのねらいどころ・手がかり）

〈付け方〉

三法

有心付：有心　向付　起情

会釈：会釈　拍子　色立

遁句：遁句

七名一八体

其人　其場　時節　時分　天相　時宜　観想　面影

○人情あり

○人情なし

○人情ありの表記体

自・他・半・会

○人情なしの表記体

場

〈二回連続三回目反転〉

○用語「会」について

北枝・支考の「会釈」は「付け方」の便法・用語。

春山洞の「会」は「会釈」の略

○執中の法
芭蕉翁二十五ヶ条

○蕉風俳諧変化表〈歌仙〉

○俳諧歌仙順序手引

語であるとともに「一句の性格判定用語」であり、東明雅『連句辞典』11頁所載「薄」人情」に当る。一句の中の人情の有無を判定するとき、表現上のあやから一見人情なしのようでありながら極めて薄い人情が認められるものがある。これを「会」と判定して、「人情ありの表記体」に加えたものである。

○一句の性格判定略解（人情有無表記体）

略解	打越	前句	付句（この略解は打越を避けるためのもの）
1	自	自	他半会場
2	自	他	他半会場
3	自	半	半他会場
4	自	会	会他半場
5	自	場	場他半会
6	他	他	自半会場
7	他	自	自半会場
8	他	半	半自会場
9	他	会	会自半場
10	他	場	場自半会
11	半	半	自他会場
12	半	自	自他会場
13	半	他	他自会場
14	半	会	会自他場
15	半	場	場自他会
16	会	会	自他半場
17	会	自	自他半場
18	会	他	他自半場
19	会	半	半自他場
20	会	場	場自他半
21	場	場	自他半会
22	場	自	自他半会
23	場	他	他自半会
24	場	半	半自他会
25	場	会	会自他半

〈資料2〉

脇起歌仙「春山の」の巻　衆判

鈴木春山洞　性格判定

オ
春山の山彦は朱髪童子かな　春場　松根東洋城
水ほとばしる雪解の沢　春場　鈴水春山洞
垣手入レするも一人の業ならん　春他　東明雅
布巾を掛けし茶布台の上　雑会　草間時彦
月に挿す芒の影のうつりつつ　月場　岡本春人
夜なべ終りて払ふ藁屑　秋自　洞
ウ
葡萄醸す香りを納屋にただよはせ　秋会　雅
思ひのほかの美女でありけり　雑半　彦
金釘の裏を返せとなじる文　雑半　人
波音を聞く泊船の中　雑自　洞
鉄鉢に霰飛びこむ旅の空　冬会　雅
根深の汁の味噌が濃すぎて　冬会　彦
おふくろの継ぎの前垂れ盲縞　雑他　人
涼しき月に屋根の青猫　夏月場　雅
麦刈りを終へし疲れのどつと出て　夏自　洞
八十路過ぎての大手術なり　雑自　人
ミルクティミルクたつぷり花の昼　花会　彦
燻し銀なるペンダント春　春場　洞
乗込を追ひて釣師の今日も来る　春他　雅
汽車の鉄橋渡る近道　雑会　彦
月見草ぽつかり富士の雪晴れて　夏場　人
夏念仏の揃ふ声々　夏他　雅
豪商の淀屋闕所の噂立つ　雑半　洞
千鳥啼き交ふ澤あり　月自　人
中年も初老も過ぎし恋ごころ　雑他　彦
何にも知らぬ女房は神　雑他　雅
跫音をしのばせ月の背戸を脱け　月自　洞
露しとどなる桔梗刈萱　秋場　彦
法師蝉大名の墓列なれり　秋場　人
ナウ
老いも若きも混ぢるジョギング　雑他　雅
癇癪を手酌の酒にまぎらはし　雑自　洞
腕の入れ墨消すべくもなく　雑自　人
年金を使はず溜めて死にける　雑他　彦
雨も上りて謝肉祭なり　春場　洞
まつしぐら花前線の北上し　花場　雅
霞たなびく子規のふるさと　春会　彦

文音　昭和五十八年十一月二十六日首
昭和五十九年九月十六日尾

〈資料3〉

『芭流朱連句』第7号

所収　歌仙　3巻。　艶　2巻。
二十韻　3巻。　二つ折　6巻。
俳諧新三つ物　8巻。　愛媛　2巻。

（平成七年一月例会）（芭流朱連句会主宰、会員）

川本臥風と松高俳句会

川本陽吾

身内のことを話すのは誉めてもくさしても聞き苦しいものですが、久山康さんの『人間を見る経験』に、臥風のことを書いた「自然諷詠を呼ぶ無心」という文章があるので、これに私の知っていることを付け加えてお茶を濁したいと思います。

(一) 林原来井先生

最初に松高俳句会とその機関誌である「星丘」のことが書いてある。「星丘」は久山さんが松高在学中の昭和八年に創刊され、十三年に一旦廃刊されたが、その後ガリ版刷りで何度も復刊され、最終号は戦争中の十九年に出ている。松高俳句会は大正十二年四月、臥風が松高に赴任して間もなく英語の教授であった来井林原耕三先生と一緒に創立した。

来井先生は夏目漱石の愛弟子であって、漱石のお嬢さんとの結婚話もあったそうである。それが実現しなかった理由については何時かは来井先生が書くといっていたらしいが、それも実現しなかった。松岡譲と久米正雄との間で確執のあった長女筆子さんのことでなく、下の妹さんとの話である。夏目家に出入り出来ないというようなことではなかったらしく、来井さんは自分の長男の名前も漱石に付けてもらっている。この長男は私より二、三才上であったが、昭和十二年頃松高受験に来たことがある。その時「ノスケなどと付けやがって」といって漱石を恨んでいた。漱石が自分の金之助からとって順之助と付けたのであった。私の母はこの順之助さんの幼少の時を知っているので「順ちゃん、順ちゃん」とよく噂していた。順ちゃんは松高は失敗したが、後、松江高に受かって来井先生を喜ばせた。ところが悲劇が起った。兄弟げんかで弟が錐で胸を突き、一時良くなったが終に助からなかった。

遠かなかな聞きあやまたぬ夕なり　　来井

はこの時の作と聞いている。しかし、それはずっと後の話で、来井先生は大正十四年五月に台北高校へ転任された。

(二) 藤代素人先生

来井さんが漱石の晩年の愛弟子であったように、臥風は禎輔藤代素人先生の晩年の愛弟子であった。漱石は英文の日本での学士第一号であり、素人は独文の第一号であった。（だから子規とも同級であったはずである）明治三十三年、漱石、素人、芳賀矢一の三人は同じ船でヨーロッパへ行く。漱石が白紙の報告書を文部省に出して

夏目狂セリと言われた時、素人はベルリンからロンドンへ行き、漱石を連れて帰国しようとする。しかし、少しも異常でなかったので先に帰国した。

『吾輩は猫である』の最後の章で、先達てカーテル・ムルという同族が突然大気焔を揚げたので、びっくりしたとあるのは、素人が「新小説」に「猫文士気燄録」を書いて、一世紀程前のホフマンの『牡猫ムルの人生観』を紹介したことを指すのである。

素人先生はヨーロッパから帰国後、東大講師、明治四十年京大教授、大正五年から八年文学部長、京大でドイツ文学を講ずること約二十年、昭和二年、六十八才で没。ドイツ文学研究の創始者である。

臥風は又、子規五友の一人、三並良先生と大正十二年の四月から一学期（この年から学年の初めが九月から四月に変更）だけ一緒であった。三並先生は明治十九年、学生ストライキをやって独逸学協会学校（現独協大学）を退学処分になったが、教授のドイツ人宣教師スピンナーに聖書の講義を聞いてドイツ語をものにする。後、一高のドイツ語教授であったのを、大正八年松高創設の際、校長由比質先生が、郷里である松高へ招いた。三並先生については臥風から何も聞いたことがない。

子規について臥風は「総理級」の人物とか、「たくらくの才」とかと書いている。たくらく（卓犖）は卓越という意味である。子規の俳句革新の仕事は芭蕉のそれと共通するとも書いている。私は昭和十五年頃に臥風と法隆寺へ行ったことがあるが、例の

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺　　子規

の句碑を見て、法隆寺の全体と対峙して少しも劣らないと評した。この句の良さと字のうまさが法隆寺の景観と映発し合っているというのである。書家の榊莫山もテレビの「人間大学」で文学碑の鑑賞にこういう見方をしていたように思う。

(三) 臼田亜浪先生

久山さんは、そこに、臥風が二十四才で松高に赴任する直前に亜浪先生に逢い、以後「石楠」に投句したと書いているが、石楠俳句との出合いはもう少し古く、大正五年である。この年岡山中学を卒業した臥風は、岡山の六高に一学期だけ在学した。この時寮の室長をしていた藤田山夢（後に司法官になる）さんの手引きで「石楠」に入ったのである。

六高をすぐやめて翌年京都の三高に入り直したのは、無試験入学というのを潔しとしなかったからである。この決断は臥風に幸運をもたらした。三高の自由の校風は臥風の性格にぴったりで、校内でも校外でも青春を満喫することが出来た。更に隣りの京大は、明治三十九年に文科大学が設置され、開学して十年ぐらいであり、草創の大博士の下に集まった俊英の助教授、講師達が、多数三高に教えに来ていた。それで臥風はどの課目も一流の先生達に教わることが出来たのである。

卯一郎臼田亜浪先生は長野県小諸の人、明治三十二年上京して和仏法律学校（現法政大学）に入学、苦学して三十七年卒業、四十二年やまと新聞編集長。大正三年、ホトトギス俳句を低徊趣味と難じ、力の俳句（意力的表現）を求めた。他方、大須賀乙字の『俳壇復古

論』に感動、大正四年三月「石楠」を創刊する。五年やまと新聞を辞し、俳壇の革新のため縦横の批判を始める。このため「ホトトギス」「海紅」の人々と疎隔することとなる。俳句に「まこと」を求め、「まこと」の追求により人間の完成があるとした。久山さんがそこに書いている「俳句道即人間道」というのはこのことである。

亜浪先生は昭和四年五月、一度だけ松山へ来られた。四国・九州の旅で神戸から船で徳島へ、高松から汽車で松山へ着かれた。その少し前に予讃線は松山まで開通した。ホトトギス発祥の地へ乗込むというので、欧州留学から帰ったばかりの臥風は大分心配したようである。しかし、鮒屋の大広間での、この地の俳人を交えての句会は大成功で、亜浪先生の最後の批評は新興石楠を背負って立つ人の気迫に満ちていて、臥風達「石楠」の誌友は非常にたのもしく思ったと後に臥風は書いている。

此処に持って来た桃太郎の起上小法師を画いた軸は、その晩の歓迎会の席で私に書いて下さったものである。後に篠原梵さんは、この軸を「絵が良い、次に字が良い、それから俳句だ。」と評したが、この

矢車の響き一天晴れにけり　　亜浪

の句は『臼田亜浪全句集』(没後、昭和五十二年刊)には収録されてないが、私は絵も字も句も大好きで、毎年五月節句に掛けている。この軸を書いてもらった時、私は母に連れられて、はじめて宴会なるものに出席した。亜浪先生は私のために「棚のだるまさん」を熱演して下さった。その姿が今も眼に浮かぶ。私が小学校二年になったばかりの時で、この年から第四尋常小学校が東雲小学校にかわった。

春蝉の声引き潮の音もなく　　亜浪

これは臥風がお伴して鹿島へ遊んだ時の句で鹿島明神に奉納の扁額にも書いてあるが、臥風も半折をもらっている。

亜浪先生の代表句としては、

廻国のあとを追ひつつ

木曽路ゆく我れも旅人散る木の葉　(大九)

郭公や何処までゆかば人に逢はむ　(大一三)

がある。

(四) ドイツ留学

次に久山さんはドイツ留学と「滞欧日記抄」のことを書いている。昭和二年五月十二日に神戸出帆、昭和四年二月十日帰朝した。「滞欧日記抄」は「星丘」には昭和二年七月十七日分までしか載らなかったが、戦後「いたどり」に、初めから昭和三年四月二十七日分まで連載された。プリントには渡航中の五句が出ているが、第一句集『樹心』にはどれも入っていない。『樹心』に載った昭和二年の句は、

鈴蘭を抱へはしけにゆられ来る　　臥風

だけである。神戸で鹿島丸まで母が見送りに行った光景で、傍に小学校へ上る一年前の私がいたはずである。私は覚えていない。当時神戸は岸壁でなく、はしけで船に乗ったらしい。

次のことばは私の分らない部分である。

先生は留学から帰られた頃には、どういう理由からであったのか事情を知らないのであるが、深い精神的苦悩を持たれたようである。そして長い苦悩の果て弁栄上人の開かれた光明念仏の道に入られた。それは先生の生涯を劃する重大事であった。……

この文章で、後半の念仏に帰して、それが生涯を劃する重大事であったというのは全くその通りである。然し苦悩というのが分らない。これについて私の子供達（男三人）つまり臥風の孫共は容赦がないので、それはカルチャーショックさと軽く言ってのける。しかし、私は中ってないと思う。

昭和二、三年（一九二七、二八）といえば大正七年（一九一八）に第一次世界大戦が終わり、昭和十四年（一九三九）に第二次大戦が始まる丁度真中で、ナチスはまだ政権を取っていなかった。ドイツの悪性インフレはレンテン、マルクの発行によって既に沈静していたが、マルクに対してまだ円は強く、日本人留学生にとってはまだ幸運な時代であった。漱石は当時の文部省の留学費ではロンドン大学の講義が聞けなかったと何かで読んだが、臥風はベルリン大学の講義を聞いた上、毎晩のように劇場へ行ってドイツ近代劇を観た。（これはドイツ語に耳をならすため、映画はまだトーキーでなかった）ダンスも習って、何とかいう踊り方が流行っていたと話していた。大学の休みには、英・仏・墺・伊・西（ギリシャ・アメリカへは行かなかった）を旅行し、カメラ、八ミリ映写機を買って撮りまくっている。

身長コンプレックスもホワイト・コンプレックスもなかったと思う。藤代先生はじめ大家達に西欧文化、キリスト教文化について充分学んでいたので、あまり驚かなかったのではなかろうか。「滞欧日記抄」を読んでもあまりショックを受けたとは感ぜられない。逆に臥風は、後で書いた随筆の中で、カフェの片隅などで、キリスト教の全面的支配の影にかくれながら、東洋的な独自の思索をするヤコブ・ベーメ的人物に遇って強い印象を受けたことを書き、留学中にそういう人に二、三会ったと書いている。逆カルチャーショックを受けた気配がある。

(五) 笹本戒浄上人

そうすると、先の昭和四年の臥風の深い精神的苦悩というのは、外から来たものでなく内からのものと考えざるを得ない。久山さんも、事情は知らないと言いつつも、次のように自分で答えを書いている。

人生の煩悶が仮初めのものでなく人間の根本に触れるものである場合、生半可な修行によって新生のかち得られるものではない。川本先生は京大を卒業し、ドイツ留学も行った教養人としての通常の在り方を抛って、専修念仏の道に直進されていた。……

それから

弁栄上人の直弟子の笹本戒浄上人という方が松山へ来られて、寺院での集会があり、私は三年生のときの冬休みを松山に止って聴講したこともあった。そして川本先生に倣って木魚を買って来て、下宿で念仏を称えてみたりもした。心に迫ってくる無常迅速の思いのなかで、真実の生命への冀求が、私にも強く動いていた

のである。……

臥風自身は「最初の印象」という文章の中で大正十三、四年頃、笹本上人が松高へ来られて、教官、生徒に「真実の自己」の話をされた時、その円満なお顔に強い印象を受けたと書く。そして「此方はほんものだ。いよいよ困った時には此方の所へ飛んで行けばいい」と思ったという。昭和四年の夏、臥風は遂に横浜のお寺へ飛んで行った。臥風は「いよいよ困った時」が別に来たのではなかった。然し、「本当に偉大なものがあるならば、それを握るに躊躇してはならない」という考えが自分を支配したのだと書いている。私が今思うには、この文章は昭和十二年笹本上人が遷化された時のものであって、実際はいよいよ困った時がやって来たのだと思われる。精神的苦悩が学生達にも見てとれたのであるから。

久山さんもいうように、ドイツ文学を専攻して官立高校の教授になり、四年目に留学、三十才で帰朝したのであるから、外面的には一応の達成といってよかったはずである。しかし、釈尊も二十九才で妻子を捨てて出家され、その前に四門遊観のことがあった。西行はもっと若く二十三才で出家した。その時小さい娘を縁から蹴落している。前日別れたばかりの同僚がその晩急死したためといわれる。臥風は父母同胞皆健在であった。強いてあげれば藤代先生が留学出発直前に亡くなっている。臥風はその見舞には行ったようなので、恩師の老、病、死を見たともいえる。

しかし、私が今になって思うには、先程は逆カルチャーショックという言葉を使ったが、何かが起ったのであろう。留学の二年間、勤勉に勉強し、毎日日記もつけた。にもかかわらず帰国すると、ストンと空しさに陥ったのではあるまいか。丁度エアポケットに飛行機が入ったように、「西洋的有」の世界から「東洋的無」の世界へスーと一直線に落ちたのではあるまいか。それは恐ろしい不安であったにちがいない。臥風は妻子を捨てて、釈尊のごとく最初から出直そうと考えたのかもしれない。私は小学二年生だったから全く気付かなかったけれど、そういう煩悶の末、笹本上人の懐に飛び込んだのであろう。おそらく発心というのはそういうものなのであろう。

この笹本戒浄上人はまぎれもなく覚者であられた。『笹本戒浄上人全集』で略歴を見ると、明治七年東京で生れ、八才鎌倉大仏殿の樹下信戒師に懇請されて養子となり、明治三十一年、二十五才で浄土宗本校卒業、翌年金沢の四高へ入学、三十五年、東京帝大入学、元良勇次郎博士について心理学を専攻する。この頃唯物論全盛の中で「真実の自己」を追求して、遂に真我を自覚する。三十三才東大卒業、大学院に在籍して横浜の慶雲寺住職となる。また、浄土宗大学、天台宗大学で心理学を教授する。四十三年には、鈴木大拙宅で西田幾太郎に催眠術に関する話をしたこともある。大正二年、弁栄上人に初めて対面され、以後指導を受けて念仏修行を大成する。大正九年、弁栄上人ご遷化の後、光明会総監となる。昭和十二年七月二十六日、慶雲寺で御遷化、六十四才であった。臥風は昭和四年夏、五十六才の笹本上人に入門し、十二年御遷化まで、八年間直接指導して頂いた。

(六) 俳句のスタンス

笹本上人の指導により百八十度の転廻をしたと臥風は書いているが、それは小学校以来教育されてきた唯物論の殻を破って、釈尊以来の仏教の唯心論の殿堂に入ることであった。俳句に対する姿勢も変動せざるをえない。

そこに久山さんも引用しているが、臥風は次のように書いている。

その年（昭和四年）の八月から自分は念仏修行をはじめた。仏教の大海に入るには不惜身命の覚悟を要する。出来得る限り諸縁を放下しようと思った。自分は俳句をやめる決心をした。勿論亜浪先生の「まこと」と、方向は同じものであるけれども、宗教と芸術と、自から途を異にする。……

しかし、松高俳句会は何年も続いていて他に指導の教官もいない。そこで、久山さんも書いている通り、「仏道の修行が第一で、俳句は従来の因縁でのお附合い」ということにしたようである。そこで久山さんの書いているように「句会の席では学生の談論風発を傍で煙草をふかしながら寡黙に聞いていて、最後に短い感想を述べるのを常とした。」この態度は終生、「いたどり」の句会になっても変らなかったようである。私は句会のやり方としてはこれが基本的に正しいと思う。自由討議をやらずに点だけ入れてその多寡だけを競うのでは全然面白くないと思う。

そういう句会を続けているうちに、久山さんもそこに書いているように、臥風は、

段々心境が安定し深まるにつれて、俳句への思いも新になり、物心一如の到り得た段階での表現を俳句で試みようとされるようになって来たのではないかと思う。そしてそれは芭蕉の俳諧の道とも符合するものであった。先生はそれを第二句集『城下』の後記で次のように書かれた。「私は俳論なるものを殆んど読んだことがないが、私なりに一つの方向みたやうなものが出来上っていた。ロダン――リルケ――更に直截で明確な『色即是空』とつづく漠然とした一路線である。」先生は新興俳句の勃興でかまびすしくなってゆく俳壇を離れて、仏道に精進されながら句作された。そしてそのことが仏道に触発されて形成された芭蕉俳諧の本道に先生を送り届けたのであろう。その上に先生には「ロダン――リルケ」と言われる西洋の近代芸術の息吹きが入っている。そこに先生の句の清水のような色と響と冷さを持ちながら、どこか近代的に清新さと繊細さをもった基調が生まれてきたように思えるのである。

此処には臥風の俳句を作るスタンスの取り方が語られている。つまり軸足を「色即是空」（久山さんは「無心」という言葉を使っている、「三昧」でもよいし、「東洋的無」でもよい）にしっかり据えて俳句をつくるわけである。イチローが軸足を決めて「無心」でバットを振ると二百本以上安打が出るというのにちょっと似ている。久山さんは臥風の生涯打率をかなり高率と見てくれている。

軸足に対して振り出して行く足にロダン・リルケの線があるわけであるが、臥風はロダンの作品を沢山見たのだろう。百科辞典で見ると一八四〇―一九一七年の人だから臥風が留学する十年前に死ん

だ人である。「建築の装飾にすぎなかった彫刻を近代芸術として出発させた」とか、「彼の求める真実は人間の内部的なものにむけられた」とかいう説明が書いてある。

リルケは一八七五年ー一九二六年の人だから臥風がドイツへ行く前年に死んでいる。彼の詩は新ロマン派と呼ばれて「宇宙における生の輪舞」（汎神論的思想）を書き、『神様の話』（一九〇〇年）がある。第三期にロダンに傾倒、愛と孤独と死を書いた。『マルテの手記』（一九一〇年）がある。臥風の句に

リルケ読み妖しき虫の夜となれり　臥風

がある。

(七) 句碑

臥風句碑は二つあって、一つは久山さんがそこに書いている

城山が見えてゐる風の猫柳

である。句碑が建ったのは戦後なので「見えている」にしている。持田の旧校地にあるというのは現在の愛媛大学附属中学校のことである。このキャンパスの真中に自然湧水の二十五米プールがあり、その水が西へ流れ出て松山中学（現松山東高）の北の田圃を小川となって流れていた。そこに猫柳があり、城山が見えていた。

句碑の石はかなりの大きさで何処から運んで来たか知らないが、トラックの運賃がかなりかかったと母が言っていた。先の法隆寺の子規句碑には及びもつかないが、近くの旧松高のグリーンの講堂や、松高卒業記念に毎学年の生徒が植えた銀杏が大樹になって、一つの雰囲気を出している。

もう一基は新居浜の船木神社境内にある。

すゝきの葉みなすきとほり月の空　臥風

である。昭和九年の句で『樹心』（第一句集）の中の句である。太山寺で作ったものと聞いている。これは新居浜の臥風ファンの人々が協力して建ててくれたと話していた。なんでも臥風はその人達と石手川源流まで石を探しに行ったそうである。

この句碑も船木ダムの湖水に面した、丘の上の船木神社の境内に建っていて、宏々とした景観に囲まれている。

(八) 恩師と弟子

久山さんは最後に次のように書いている。

私は先生によって大切な青春の時期に、宗教によって真実の人生を生きる人の真摯な姿というものを、身近に見る経験を与えられた。そして同時に自然と人間と一体になって生きる俳句の世界に導き入れられた。それは私に芭蕉の世界、さらに良寛やアッシジのフランシスの世界への関心を開く一つの契機ともなって、私の人生にとって大きな出来事となった。其後、私は何人かの人生の師と呼ぶべき人に邂逅したが、その初めの人は川本臥風先生であった。

この最後の所で何故良寛やフランシスが出るのか分からないと思っていたのであるが、先程のリルケの汎神論的思想というので思い当った。臥風は昭和四年に笹本上人に帰依する以前から、仏教の「一切の生物仏心あり」という思想（大正十一年「石楠」に書いた随筆）に注目していたようである。これは「山川草木悉皆成仏」という句

の解釈だと思うが、すると良寛が筍のために床を切り抜いたり、フランシスが小鳥に説法することときれいに繋がる。久山さんの場合は、宗教面では念仏からキリスト教へ、俳句は実作から芭蕉・良寛・フランシスの世界へ、ドイツ語では後にケルケゴールのドイツ語からの翻訳を何点か出すというふうに展開したが、臥風の三人の恩師、笹本戒浄上人、臼田亜浪先生、藤代素人先生から得たものを見事にお弟子にバトンタッチしているといってよかろう。

これを松高三十年の歴史で見渡すと、先ず宗教面での影響であるが、念仏修行を臥風から知って、生涯これを捨てなかった者が約三十人。久山さんのように後キリスト教へ行った人も二、三人はいるようだが、東専一郎さん（この久山さんの文章の中では同級生の東茱萸（しゅゆ））のように、京大へ行ってから久松真一先生に出遇って禅に進んだ人もいる。

次に俳句であるが、松高俳句会で臥風に習った人で、今も俳句を作っている人が何人いるか見当もつかない。有名なのは篠原梵、八木絵馬、西垣脩といった人であるが、これは臼田亜浪先生が東京に居られて、東大に進んだ人が「石楠」で活躍したからである。

ドイツ文学については、愛媛大学になってから専攻生を受けたわけであるが、現在京大教授の飛鷹節さんがいる。臥風のドイツ文学に関する文章を集めた『ゲーテと鷗外』という本があるが、これの後記に臥風のドイツ語、ドイツ文学に関する貴重な、ありがたい文章を頂いている。面白いことにこの飛鷹先生が、数年前、近頃禅堂に通って禅を習っているという便りを下さった。

つまり、笹本上人、亜浪先生、素人先生という日本最高級の師匠に出遇うという幸福を得た臥風が、良きお弟子にも恵まれて、この松山という街だけに住み、戦前、戦中、戦後約六十年の生活を続け、八十三才でまあ天寿を全うしたのは、息子の私から見ても幸福な人であったと思われます。

やはり賞め過ぎになったでしょうか。割引きしてお聞き取りになって下さい。

（平成六年十一月例会講演）（会員）

子規と周辺の人々に関する研究論文

子規記念博物館編

正岡子規

子規庵の庭　吉田漱　「青幡」1号　平成4、11
子規庵の一夜　野上洋　「青幡」1号　平成4、11
ぬれ雑巾　正岡明　「青幡」1号　平成4、11
子規庵の女たちの愛と抵抗　佐伯裕子　「青幡」1　平成4、11
子規の随筆より　池田はるみ　「青幡」1号　平成4、11
上根岸の思い出　湯村永子　「青幡」1号　平成4、11
『病牀六尺』とフランクリンの『自叙伝』　森田孟　「青幡」1号　平成4、11
子規と左千夫との出会い　清水万佐秀　「青幡」1号　平成4、11
子規について　清水万佐秀　「青幡」1号　平成4、11
子規と時鳥(一)～(九)　小野寺幸男　「青幡」1号　平成4、11
子規をめぐる人に光を『子規のことなど』　菊池原芙二子　「青幡」8号　平成6、3
「子規居士の墓」考　伊吹純　「青幡」8・9号　平成6年4・5
子規の手紙「今一便ヨコシテクレヌカ」　村松和夫　「青幡」9号　平成6、5
子規の身丈について　伊吹純　「青幡」12号　平成6、11
子規の諷刺から嘲鳥へ　和田茂樹　「星」　平成6、1
面倒苦斎と馬革斎　和田茂樹　「星」　平成6、2
子規と落語　和田茂樹　「星」　平成6、4
子規の嘲鳥へ　上・下　和田茂樹　「星」　平成6、5・6
久松定靖公と正岡子規　和田茂樹　「星」　平成6、7
久松定謨伯爵と正岡子規　和田茂樹　「星」　平成6、8
正岡子規と清水則遠　上・下　和田茂樹　「星」　平成6、9・10
正岡子規と新海非風　上・下　和田茂樹　「星」　平成6、11・12
『幼学便覧』私考 ― 正岡子規少年時作詞手引書のこと ―　4～6　清水房雄　「愛媛アララギ」　平成6、1～3
仰臥漫録（俳句教養講座138）　清崎敏郎　「若葉」　平成5、12
子規春の歌と純粋性　田中安曇　「短歌」　平成6、1
随想・子規の表現　(4)～(6)　長谷川孝士　「楪」　平成6、1～3
正岡子規とその周辺　63～74　畠中淳　「杜鵑花」　平成6、1～12
正岡子規における芭蕉と蕪村　佟君　「杜鵑花」　平成6、1～12

子規と内藤世南 (一)(二) 白田三雅 「虎杖」 平成5、12 平成6、2

愚陀仏庵の子規と漱石 児玉正 「俳星」 平成6、4

子規新古 17～24 山下一海 未来図 平成6、5～12

子規逍遥 (1)～(6) 伊藤肇 「愛媛若葉」 平成6、7～12

愛媛の俳人正岡子規 (11)～(16) 青木満子 「銀河」 平成6、7～12

子規の功罪 金子洋二 「こぎたつ」 平成6、7

正岡忠三郎 樋口覚 「群像」 平成6、7

生前の子規の目 佐伯照市 「子規研究」 19号

子規短歌と万葉集 11～14 片山武 「子規研究」 19～22号

子規『俳句分類』雑考 3～6 立川淳一 「子規研究」 19～22号

冨士山を詠吟した子規の俳句攷 小林高寿 「子規研究」 19～22号

ぬれ雑巾 ― 父正岡忠三郎のこと (一) 正岡明 「子規研究」 22号 平成6、10

晩年の子規 上・中・下 宮坂静生 「俳句研究」 平成6、9～11

子規の一句 井上信興 「紫苑」 平成6、7

特別座談会 正岡子規と俳句革新 沢木欣一・川崎展宏・平井照敏・佐々木幸綱 「俳句」 平成6、10

俳句こそわが文学 ― 子規と秋桜子 倉橋羊村 「馬酔木」 平成6、10

正岡子規と海南新聞の俳句 ― 明治二十九年夏季 和田克司 「大阪成蹊女子短期大学研究紀要」第31号

俳句の翻訳に就て ― もう一人の子規 松井貴子 「俳句文学館紀要」8号 平成6、8

虚子の子規像 柴田奈美 「むさしの文学会報」 23号 平成6・8

『仰臥漫録』のエクリチュール 井上夏樹 「むさしの文学会報」 平成6、8

子規の小説 ― 写生文の前と後 ― 国中浩 「むさしの文学会報」 平成6、8

「熊手と提灯」 ― 子規写生文の一例として ― 松田昌哉 「むさしの文学会報」23号 平成6、8

夏目漱石

夏目漱石の全小説を読む 木股知史ほか「国文学解釈と鑑賞」 平成6、1

漱石とその時代 第4部 1～12 江藤淳 新潮 平成5、11・12、6、2～11

夏目漱石著書目録 1・2 「古書通信」 平成6、1・2

対談 隠蔽から告白へ 漱石とその時代第三部について 江藤淳・古井由吉 「新潮」 平成6、1

パリの漱石 武田勝彦 「文学界」平成6、3

『こころ』の遺書の構造と意味　江種満子　「国語と国文学」　平成6、3

漱石の徴兵拒否再論　森静郎　「子規研究」20号　平成6、4

『明暗』論　女としてのお延と男としての津田について　飯田祐子　「文学」　平成六春号

『それから』の漱石　高階秀爾　「新潮」　平成6、6

漱石の童謡　阪田寛夫　「狩」　平成6、7

漱石・その俳句と人生　稲垣麦男　「俳句とエッセイ」　平成6、8

漱石と相生由太郎　楠谷秀昭　「新潮」　平成6、10

『道草』のヒステリー　江種満子　「国語と国文学」　平成6、12

その他

続・伊予俳人列伝・柳原極堂　1～8　池内けい吾　「春耕」　平成6、1～8

続・伊予俳人列伝・村上霽月　1～4　池内けい吾　「春耕」　平成6、9～12

対談・ホトトギス俳句百年史　「ホトトギス」　平成6、1～2、4～8、10～12

明治の俳句史について　草間時彦　「椋」　平成6、1

五百五十句研究　50～61　「花鳥諷詠」　平成6、1～12

伊予俳人録　25～33　白田三雅　「虎杖」　平成6、3～5、7～12

近代俳句を見直す　1～3　「俳句」　平成6、10～12

虚子のあしあと　(25)～(36)　「ホトトギス」　平成6、1～12

高浜虚子論　宮坂静生　「日本現代詩歌研究」第1号　平成6、3

虚子の人間描写（俳句教養講座144）　清崎敏郎　「若葉」　平成6、6

高浜虚子の俳論に見る多重表現　阿部誠文　「俳句文学館紀要」8　平成6、8

虚子とはん女　堀流水子　「若葉」　平成6、8

キューガーデンの虚子句碑　石川星水女　「花鳥諷詠」　平成6、9

河東碧梧桐　1～10　「俳句」　平成6、3～12

碧梧桐と天郎　森静郎　「子規研究」22　平成6、10

野間叟柳　弘田義定　「糸瓜」　平成6、5

村上霽月「大洲旅日記句抄」のこと　上杉閟　「せきれい」　平成6、1・2

晩年の東洋城先生　松岡六花女　「渋柿」　平成6、1

広辞苑の東洋城　野口里井　「渋柿」　平成6、2

浅間山麓の東洋城先生　高崎古秋　「渋柿」　平成6、4

東洋城寅日子両吟歌仙「冬空や」の巻私解　野口里井　「渋柿」　平成6、6

栗の里伊予中山に城師の句碑建つ　米田双葉子　「渋柿」　平成6、8

「東洋城寅日子両吟歌仙冬空や の巻私解」読後　鈴木春山洞　「渋

柿」 平成6、9
子規博に寄託された東洋城遺墨 三田孝太郎 「渋柿」 平成6、10
内藤鳴雪と雅号 畠中淳 「子規研究」19号 平成6、1
内藤鳴雪の奇行逸話 畠中淳 「むさしの文学会会報」No.23 平成6、8
松山の草田男墓碑 福田甲子雄 「糸瓜」 平成6、9
俳句気まま歩き(6)芝不器男の里松野町 草間時彦 「俳句研究」 平成6、6
朱燐洞の人と俳句 33〜43 豊田美奈子 「砂山」 平成6、1〜3、同5〜12
朱燐洞の孤独の山 木曽聡 「井泉」40号 平成6、11
一茶をめぐる六人の女 森幸子 「楪」 平成6、3
小林一茶と栗田樗堂 森幸子 「楪」 平成6、6

越智二良遺稿集補遺

川柳論片

▲川柳眼を以て社会を見れば、滑稽の事が多い。それを縦横に切り回すのが川柳の超然たる所である。そうして一読誰にも解し得る通俗的たる事が川柳の特色である。

▲六ケ敷い、解し難いものは、何でも好ましくないが、川柳には尚更禁物である。

▲川柳にして、在来の滑稽詩に満足し、即ち古人の糟糠を嘗め、陳套を脱しないでは韻文に圭角を認められまい。

▲松山は明治俳句の源泉地である。がまた川柳の最も盛んな地の一つである。

▲芭蕉の「初時雨猿も小蓑を欲しげなり」の句に、政子は「そんならば芭蕉小蓑をやれば好い」とやった。俳句の聖人も川柳にかけてはぐうの音も出ない。

▲俳句は幽玄で韻致があり、川柳には、一種さばけた、砕けた趣味がある。妄りに軽すべきでないが、今の処俳句は防守的で川柳は攻戦的だから面白い。

▲ある点において川柳は俳句より超然優っていると言っても、無理な賞語ではない。

▲川柳の味を知り、趣味を解するようになると、俳句の沈趣味に

なる。

▲人間は社会的であるから、自然の景を詠うた俳句よりも、社会人事風俗を滑稽化した川柳の方が余程面白い。

▲不景気な芭蕉の句より、飄逸な超然的な一茶の句の方が感興を吾人に深く与えると言うのは、つまり一茶の方が川柳眼をもっていたからだ。

（明治四〇、一二、一四）（海南新聞）

可笑味

▲川柳とは何ぞ。いろいろに六ケ敷い解釈もあろうが、ザックバランに「笑はせる十七字詩」と解する。

▲笑はせると云ふ以上（無論笑はせないものもあらうが）どうしても多少の「可笑味」が含まれてなくてはならぬ。可笑味と云っても、下劣卑猥は勿論排斥せねばならぬ。要するに「軽妙」「洒落」「滑稽」「穿ち」「諷刺」等が川柳の本領である。そして之等はみな一の「可笑味」に外ならぬ。

▲「可笑味」は川柳の本領である。且つ又川柳以外の韻文によって表し得ない所である。川柳独得の異彩である。又滑稽的「嘲弄」、強く行っては気味の好い「罵倒」、みな川柳の特長であるが、いづれにしても、滑稽可笑味は含まれてゐなければならぬ。

▲これまで川柳は、卑猥下司趣味と誤解せられてゐた余波からして、目先の変ったことをしようと、一筋に高尚々々と新奇を衒ふのは、其の抱負は喜ぶべきだが、其の処置を得ないで、却って有難迷惑である。高尚優美を表はしたくば、歴とした俳句もあるではないか。やはり川柳の価値は滑稽にある。

▲高尚の中にも可笑味が添うればそれこそ川柳の上乗である。

▲今の一種高尚々々と云ふ写実派は僕のとらぬところ、やはり川柳の特色は、滑稽、「可笑味」にあると思ふ。叙事にでも叙景にでも叙情にでも、どうしても一種の「可笑味」は含まれてゐなければなるまいと思ふ。

（明治四一、一、一一）（海南新聞）

撮影

「今日は撮るかな」

と布衣呂も這入って来る。近眼子の病床を囲んで座ったのが哲笑子、川影子、緋威子、抱春坊、それから今日は写真師の格で加藤の由さん、それに布衣呂。柳眼子は向ふの間でオルガンを弾いている。

写真を撮すと云ひ出したのは、もう一週間ばかり前、そして二三度も集まったが、いつも雪もよひで、室内に寝ている近眼子を写すには、あまり光線が鈍いと云ふので、遂々今日になったのだ。

近眼子は身体こそ自由ぢゃないが、仲々の元気で、いつも寝て

ゐるから、読書をやる、大抵な書籍雑誌を読む。だから何でもよく知ってゐる。従って難解の句などは近眼子に訊く、大抵はわかる、同人の一面、教師なのだ。

川眼子も来る、みな揃ろふ。柳眼子もオルガンをやめて来る。障子をみな外す。近眼子を布団と一所に椽近かく引っぱり出す。

「こゝで好えかな」

「滋ちゃんもっと後ろい、お前、そうそ、うんもうちいと下りや、二人なるたけ近よって、あゝそうそ。」

由さんは頻りにヒントを合はす。

写真屋は獅子うづくまる姿なり

と云ふ誰やらの句を思ひ出す。

「そうそ、それも並べとおき、柳絮集を見えるやうにおしよ」

と、川柳入門や、大全や、川柳抄や、新柳樽や、川柳の書物をありったけ並べる。

「柳絮会とかいて貼っとこや、どこぞい」と布衣呂が云ひ出す。

「誰ぞが持つのよ」「それより、例の癖を紙いかいてみいながもとや」

「イヤー、宜からう」哲笑子が妙な声を出す、イヤーと云ふ感歎詞が哲笑の「例のくせ」なのだ。確かにと云ふのと、アハアハ、、と云ふ哲笑子独特の笑声もある。

「糞もたらん」これが布衣呂の口癖、「弱った」と云ふのが緋威子の癖、「弱った」は柳絮会の流行になって了った。大に愛嬌のある間投詞となった。「アッ川影子」これが川影子の口癖で、「馬鹿云へ」もその一つだ。

「もう他所外顔をせうかな」

白毛布の上へ座ってゐるのだ。川影と哲笑とが重なって、中央の臥床の近眼子に柳眼子が凭れる。川眼子は椽に腰をかけて、緋威、布衣、抱春が重なる。

曼とシャッターの音がする。

「アラもう済んだんかな」

「しもた笑ひよった」

「私も知らなんだ」

落し物でもしたやうな気。室に人って、障子を入れて、また雑談を初める。布衣呂はハモニカで六段をやる。（二月七日）

（明治四一、二、一三）（海南新聞）

子規会報　第六十六号
季刊（四、七、一〇、一月）
発行日　平成七年七月十九日
発行　松山子規会
松山市末広町正宗寺内
郵便振替　徳島二―一八六八

お買い物が5%ご優待割引で！

会員様募集中

《ご入会のお申し込み お問い合わせは》いよてつそごう南館3階
カードサービスサロン ☎(0899)48-2630
いよてつそごう各店でも、ご入会のお申し込みを承っております。

暮らしにお役に立ちます。いよてつそごうカード。

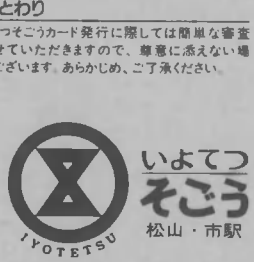
いよてつそごうカード

- ●お買い物5%ご優待割引
- ●キャッシングサービス
  （提携先 株式会社マツセン
  登録番号 四国財務局長(2)第00051号）
- ●クイックローンサービス
  （提携先 株式会社マツセン）
- ●お中元・お歳暮シーズンのギフトは特別価格で
- ●いよてつそごうの駐車場が無料扱いに

- ●お得な催し 素敵な集いにご招待
- ●各種ご優待施設

万一、失くしたときも安全です。
安心してご利用いただくために、カードには盗難保険をかけています。紛失や盗難などによる不正使用にも万全を期しています。
（この保険料はいよてつそごうが負担いたします。）

おことわり
いよてつそごうカード発行に際しては簡単な審査をさせていただきますので、尊意に添えない場合もございます。あらかじめ、ご了承ください。



松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴堂本舗

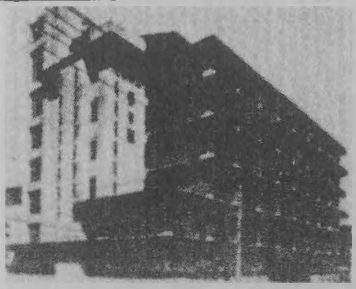
TEL 0899 (41) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ
四季の移り変わりを楽しめる露天
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

ホテル 春日園

〒790 松山市道後鷺谷町3-1
☎(0899)41－9156



お食事処…かすが…
石畳，格子戸，木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

新刊案内

第10回愛媛出版文化賞受賞作品

占領期における愛媛の教育 野口 学 著

A5判 352頁 定価2,400円

自費出版

お気軽にご相談下さい。
編集からお手伝いさせて頂きます。

印刷 & 出版 (有) 青葉図書

〒790 松山市小栗6丁目3－23 ☎(0899)43－1165

¥ 300